やまさき文化

’２４－３＊No.４３

宍粟市山崎文化協会

一枚の節供幟（せっくのぼり）

宍粟市山崎文化協会長　**前野良造**

五月下旬の日曜日、一人の青年が「大きな『節供幟（のぼり）』を見せてほしい。」と言って来宅した。当家に残る三枚の節供幟の内の一つ、騎乗の神宮皇后（じんぐうこうごう）と赤ん坊（のちの応神天皇（おうじんてんのう））を抱く竹内宿祢（たけのうちのすくね）が描かれた大幟（幅：約一m、高さ：約十m）をお借りしたいと言う。「どうしてこの幟のことを知っているの？」と尋ねると、十七年前、たまたまこの幟に出会ったとのこと。「この作者『井上東渓』は姫路藩お抱えの絵師で、江戸後期から末期にかけて活躍した人物です。今度〝姫路城世界遺産三十周年記念〟『酒井家姫路藩の文化』と題する特別展を開催するに当たり、ぜひこの大幟を展示させてほしい」と。

山崎の町割りや文化を訪ねるイベントで節供大幟三棹を展示したことがあった。当時高校生だった彼は自転車で姫路から一人で山崎に来て、たまたま立ち寄った宅で展示されていた古い幟に会い、興味を持ったことがその後の彼の人生を大きく方向づけたようだ。独学で古美術や古文書を学び、今は三星会という酒井家所縁の団体に所属している。姫路市立城郭研究室と共催で今回の特別展を開くことになり、彼は企画・監修・運営を中心になって進めた。開催中何度か行われた展示解説でも百数十点の展示物全ての解説を一人で約一時間半にわたって全く淀みなく説明、観覧者の傾聴と感心を集めた。

有名な図柄を大きな一枚布に描いたこの作品は迫力があり貴重なものだが、酒井家の文化を語る上で不可欠で大きな展示スペースを占めるだけの価値があるとは思えなかった。ただ、彼にとっては自分の進路の大きなきっかけとなったこの幟をどうしても展示したかったのだろう。保管状態も良くなく傷みの激しい実物を立てるわけにはいかないが、いつかレプリカを作って五月の空に翻らせたいと言う。彼にとってまさに、「男子の健やかな成長と武運長久を願った『端午の節供』幟」となったようだ。

◇　目　次　◇

一枚の節供幟　前野　良造　1
訳者としての木村宗三　柳田　芳伸　2
特別寄稿
山崎を離れて三十年の節目に　辛川　誠　9
短歌
俳句
トロンボーンと私　山崎　智絵　13
活動と交流の再会　中尾　富子　15
ＳＤＧｓに取り組んで　松山　洋士　17
笑顔で民謡を！　小林　由佳子　17
私が米寿を迎えた喜びと　赤木　達二　18
かなり昔の新入社員の思い出　内海　真理子　18
高齢化と新型コロナに　三宅　哲朗　19
悩まされながらも…　山根　和成　19
五十周年によせて　大東　千津子　20
母娘共演で歌える喜び　緒方　加奈　20
今、想うこと　岡本　美穂　21
鶴﨑先生を偲ぶ　田中　洋子　21
オカリナとの出会い　加古　玖美子　22
山崎八幡神社の能舞台に立って　坂東　寿賀幸　22
戦争の遺跡忠魂碑について　大谷　司郎　23
感謝の気持ちをもって　藤永　幸正　23
詩吟とともに五十余年　山口　摂徹　24
これからの宍粟に思いを馳せて　山中　潤一　24
私の歩き遍路　野村　和男　25
阪本喜美枝先生を偲んで　清瀬　恵子　25
川柳破丸会　長川　伸介　26
山崎・加生・つた・いさわ冠句会　中瀬　公三　27
ともしびの賞受賞（鎌田裕明さん）　28
事務局だより　伊藤　次郎　29
編集後記　大谷　司郎　29
表紙画　土方　研三
表紙題字　山部　桂翠
挿絵　土方　研三

訳者としての木村宗三

柳田芳伸

フランス万博と木村

本誌の性格上、アカデミックなものよりも啓蒙的な書き物の方が相応しいようである。それゆえ、以下では、筆者の非才により、部分的に小難しい箇所も避けえず、併存してはいるけれども、その辺りは飛ばし読みして頂き、通読してもらえれば、冥利に尽きる。

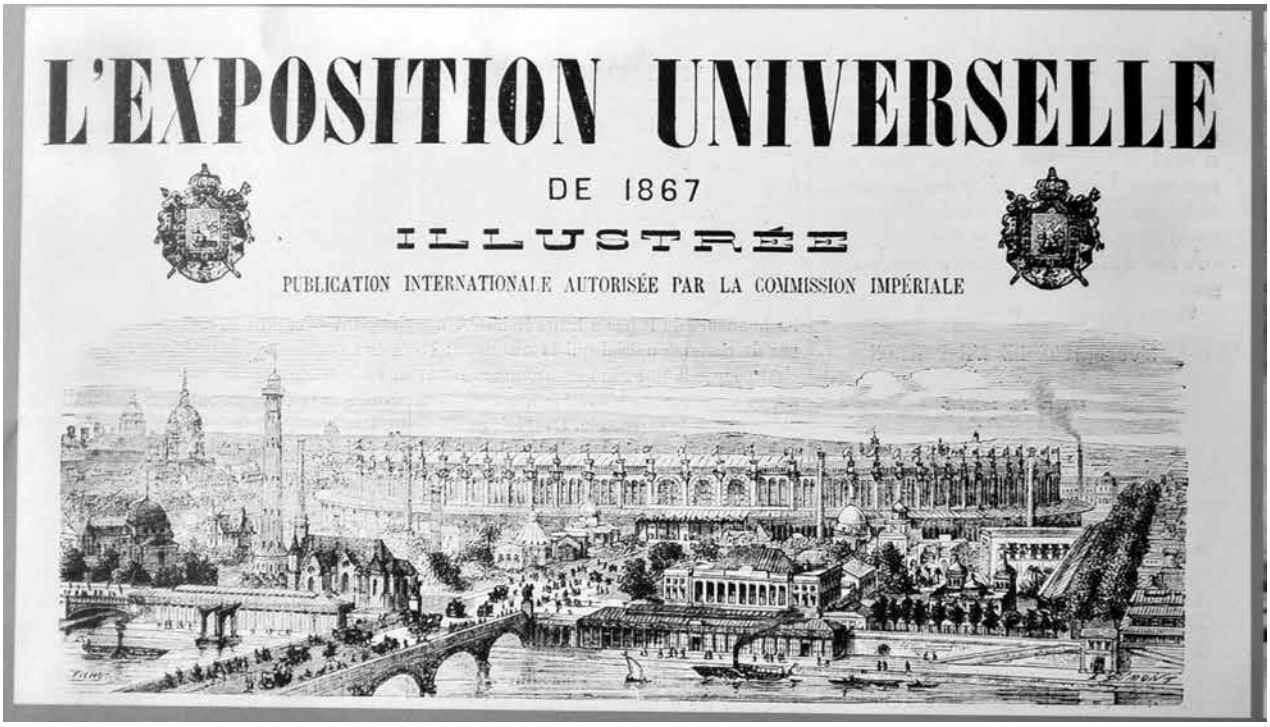
さて、来年はいよいよ2度目の大阪万博の開催年である。入場料が高目に設定されているのは残念ではあるけれども、心待ちにしている方もさぞかし多いであろう。年配者には「太陽の塔」を象徴にした1970年万博が思い出され、懐かしいかもしれない。筆者自身も山崎高校在学時に学友たちと神姫バスで吹田市・千里会場へと嬉々として乗り込み、無我夢中で競い合いながら、パビリオンを駆けずり回ったことが鮮やかに脳裏によみがえってくる。昨日のことのようにも思える。

遡れば、齢14才であった徳川昭武（1853-1910、斉昭の18男、後に11代水戸藩主）は16歳年上の兄・慶喜の命を受け、将軍の名代として、現在エッフェル塔が屹然と立っているシャン・ド・マルスを会場（大きな楕円形の建物、縦400メートル超、横300メートル超）とした第2回パリ万国博（1867年4月1日～11月3日、組織者は社会学の祖フレデリック・ル・プレ［1806-82］と経済学者のミシェル・シュヴァリエ［1806-79］）へと派遣された。実際、昭武は毎日とはいかないまでも、何度か会場を訪ねている。ここで注目する木村宗三（1831-?）は**山崎藩の御雇**として、その時に随行した使節団27人（その他従者4名）の1人にほかならない。一橋家の家臣であった木村が選抜されたのは番所調所時代（1850年代後半）以降に磨いてきていた語学力を買われてのものであったとはいえ、同時に木村を選んだ明敏であった山崎藩8代本多忠鄰（ただちか）公（1812-74）の達見も見過ごされてはならない。その他の随行者の中には、今度の新1万円札の図柄となっている卓越した実業家にて慈善家でもあった渋沢栄一（1841-1931）や民法典の編纂に尽力した津山藩生まれの箕作貞一郎［後に「麟祥」と改名］（1846-97）、あるいはかのシーボルトの長兄であるイギリス贔屓（駐日英国公使館付通訳）のアレキサンダー（1846-1911）らがいた。

ちなみに、初期の万国博の各入場者数を一覧しておけば、第1回ロンドン万国博1851年が603万人で、第2回ロンドン万国博1862年が610万人。また、1855年第1回パリ万国博には516万人が、第2回パリ万国博には1,500万人が足を運んだ。駐日仏公使レオン・ロッシュの強い進言で、日本（幕府ではなく薩摩藩・肥前藩）が本格的に出品（磁器、養蚕、漆器、手細工物、紙）するのは第2回パリ万国博からであるけれども、駐日英国公使ラザフォード・オールコックが自ら沢山の日本製品を第2回ロンドン万国博に出展している。こう見てくるなら、東の小国日本をめぐっても、犬猿の仲であった大国のイギリスとフランスとが当時覇を競っていて、幕府がフランスとの関係を深めていき、イギリスの方はむしろ新（明治）政府との関りを模索せざるをえなかった時局が垣間見えてこよう。

翻訳者としての木村宗三

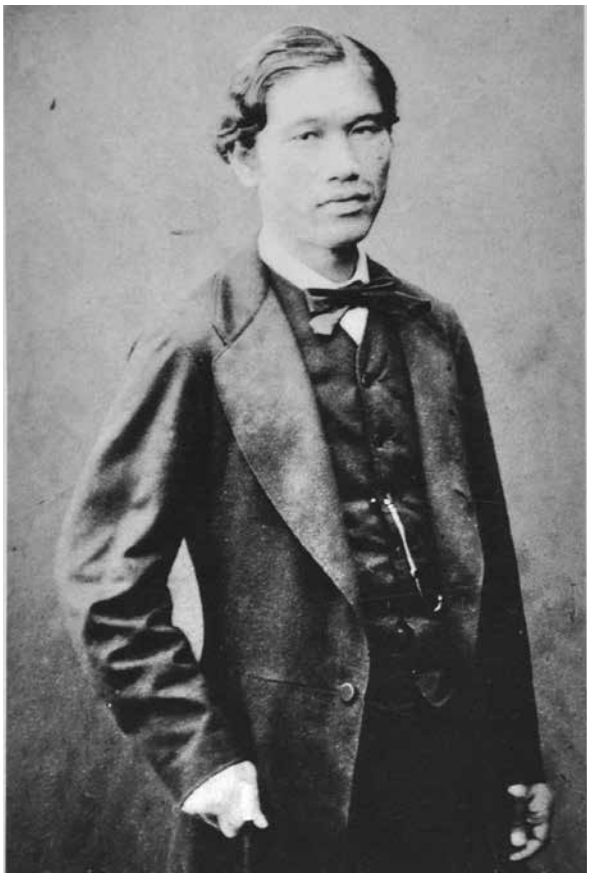
ところで、上記の木村宗三は決して見落としてはならない明治期の啓蒙思想家の1人物であったと考えられる。なるほど、著述物こそ見受けられないけれども、訳書の方は少なくないのである。管見の限りで［ちなみに、川戸道昭編『幕末明治翻訳書事典』（国書刊行会、2020年）が逐次刊行されつつあるが、木村の名は見当たらない］、兵法関連書を除いて、列挙してみたい。まずは、19世紀オランダで刊行されていた大衆啓蒙月刊誌の1855年分が「月刊志林用マカセイン分配記」として蕃書調所の11人によって紹介されているが、木村はその1名であった。ついでは、Arusoreperu（アンソレールペール）*,Pourquoi et Parceque,1867*を『子供らの読むべき理学の問答』（函館屋大蔵、1876年10月）として単独訳している。これはフランス留学時に「大番格砲兵差図役頭取勤方」を拝命していた木村にとっては造作ないものであったろう。その後も、マイエル［Alexandre Mayer,1814-96：ベルフォール（Belfort、フランス中西部の町）生まれで、パリ医学部で学んだ後、パリ市の公衆衛生委員会の委員となり、クインゼ・ヴィングツ病院の検査官に転じ、『ブザンソン（フランス東部の都市）とフランシュ・コンテ（フランスの東部地方）に関する医療誌』（1847-8年）を発刊し、さらに1893年には『医学雑誌』を創刊した。また、1855年の万国博覧会に展示された熱発生装置をも発明し、ナポレオンにより1802年に制定されレジオン・ドヌール（名誉軍団国家）勲章を授与され、最後はパリにて死去］の大作『婚姻関係論：人口、健康衛生、及び公共道徳の3つの観点からの考察』（初版1847年、2版1851



第２回パリ万博会場　「渋沢栄一、パリ万国博覧会へ行く」
パンフレット　公益財団法人渋沢栄一記念財団　2017年

年、3版1857年、4版1860年、木村訳の底本である5版1868年1月1日、6版1874年）を『婚姻新論初篇』（1878年8月）96頁、及び『婚姻新論二篇』（1879年8月）76頁として公刊している。

これは東本願寺翻訳局［1873年8月に開局し、75年に「訳文局」と改称し1878年9月に閉局、ちなみに1873年8月～74年9月の局長は成島柳北（1837-84年）で、隠棲後の72年9月～73年7月に東本願寺の法主現如上人（大谷光瑩）に随行して欧米を視察し、その後この旅程を「航西日乗」として発表した］から木村に委託された仕事で、さらにもう1巻の邦訳書が企画されていたけれども、これは未完に終わっている。また、校閲には（浄土）真宗大谷派の僧侶であった金浦正弘（しょうこう）があたっている。石川県に居住していた金浦は1873年11月には「翻訳局用掛」に任命されていて、どうやら木村の知友であったようである。その他、翻訳局の訳稿［翻訳局からの出版物は4部10冊のみだが、訳稿を含めると30余部136冊、延べ訳者数は20名余り］ではあるものの、ジョゼフ・エルネスト・ルナン（1823-92）の『ヨブの生涯（Vie de Jesus）』（1863）を2巻（乾222頁、坤131頁）の『耶蘇伝』（1875年）として翻訳しているし［底本は英訳書］、3冊の稿本『韋陀（いだ、ヴェーダー、あるいはバラモン）教』（1877年）やこれと同じ内容の1冊の稿本『宗教新論』（1878年2月）を世に送り出してもいる。



木村宗三　『文明開化のあけぼのを見た男たち -慶応3年遣仏使節団の明治』松戸市戸定歴史館、1993年、41頁

たまたま用いた第5版の立つ位置

これらの内、ここで取り上げるのは代表的な訳業と目される2冊の婚姻新論である。先述したように、木村が座右に置いていたのはマイエルの著作の5版である。木村の渡仏期間（横浜からアルフェー号に乗船し旅立ったのが1867年1月11日、2月11日にはスエズからシュエスという蒸気車でアレキサンドリアへ、再度、別な郵便船でマルセイユへ、3月に入り蒸気車でパリに、同月7日にはパリ万博へ。11月中頃には留学生活に入る、但し幕府より下された正式な留学辞令の日付は12月18日、砲兵学を専攻し、68年1月6日よりソウサンジナンデルン街10番ソバール方で200フランの下宿生活;帰路、同年4月24日に、大政奉還を知り、慌ただしく蒸気機関車でパリを離れ、今度はスエズから快速船に乗り、上海で乗り換え5月16日に横浜着）を考え合わせると、このこと自体は極めて当然の成行きである。つまり、木村はその時パリから新刊の5版を持ち帰っていたのである。

偶然事であるとはいえ、この史実は黙視し難い。言うまでもなく、マイ

エルの当該書は今日では稀覯書の部類である。原本は容易に目にしえない し、入手し難い。筆者も海外の所蔵機関が提供している電子本（但し、初版本を除く）を一覧したに過ぎない。仮に文字の大きさや組版の仕方がほぼ同じあるとしたなら、2版は270頁で、3版に至り384頁と増補され、4版では一段と膨らみ419頁となっている。底本5版は423頁であるから、総頁数だけでみるなら、4版とほぼ変わらない。

大掴みするために、初版に「離婚について」と、「女性に関する心理的・肉体的研究」との2つの章が付加されたとされる2版の目次を掲げてみよう。序（7-22）、前言（25-30）、1編：1章「再生産行動における本能」（35-64）、2章「人口の過剰な拡大への妨げ」（65-104）［この章は、1節「予防手段」（66-7）、A「道徳的抑制」（67-86）、B「合法的妨げ」（86-93）、C「女性器官の調節による妨げ」（93-101）、D「人工による妨げについて」（102-3）、2節「破壊的手段」（103-4）というように細区分されている］、3章「受胎の人工的予防手段」（105-21）、2編：1章「女性に関する心理的・肉体的研究」（127-63）、2章「結婚について」（165-97）、3章「離婚について」（199-217）、4章「社会的状態との関係における女性の運命」（219-58）、「付録」（261-70、ここでは、植民、産業、教育、鉄道、監獄、慈善をも含む様々な衛生問題を視野に取り込もうとしている）、という配列になっている。3版や4版では、2版の2編に「月経期間の夫婦関係」と「結婚という観点から考察した老年について」との2章が追加、挿入されている点が主たる変更となっている。

3編に再編集された5版と6版とは同じ構成となってはいる。しかしながら2～4版の内容編成と比べると、大きく異なっている。木村が利用したのは5版であるゆえに、厭わずに列記したい。1編人間種に関する総論：1章「心理的肉体的関連での男女の比較研究」（2-45）、2章「社会的状態との関係における女性の運命」（46-89）、3章「結婚について」（89-144）、2編夫婦や子供という視点から見た結婚関係（145-6）：1章「既に論じた点で、どこで小生が観察した問題であるか、本能だけで人間についての再生産行動を取り扱わねばならないか」（147-81）、2章「人口の過剰な拡大への妨げ」（182-268）［この章は、さらに、1節「予防手段」（183）、A「道徳的抑制」（183-222）、B「合法的妨げ」（223-234）、C「女性器官の調節による妨げ」（235-48）、D「予防的手段に不都合な時代における結婚関係について」（249-57）E「人工による妨げについて」（258）、2節「破壊的手段」（258-68）、という具合に区分されている］、3章「受胎の人工的予防手段」（269-93）、4章「月経期間の夫婦関係」（249-322）、3編結婚に伴う不都合な状態について（323-4）：1章「結婚という観点から考察した老年について」（325-352）［この章は、1節「老齢期における夫婦関係」（326-47）と「老齢期における結婚と若い女性」（348-52）とに大別されている］、2章「異母間の縁戚関係」（353-80）、3章「結婚から見た病的遺伝について」（381-97）、及び付録「離婚について」（398-423）となる。したがって、マイエルは5版に至って、4版までの内容を大幅に組み換え、かつ「此書の第一版を公布したる後に集めたる」（『二篇』5）諸資料を加えつつ、集大成させていったと看取できよう。

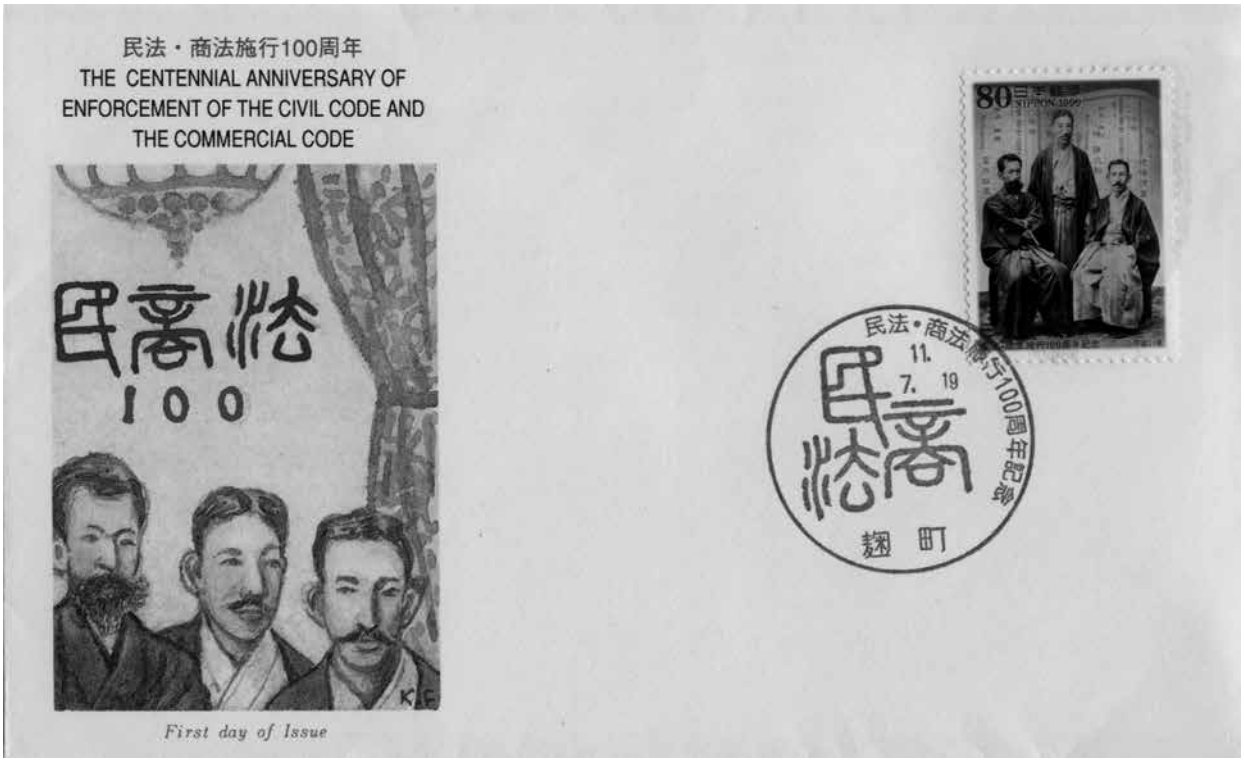
※著者としてはマイエルの原文の目次に添って忠実に訳出した。ただ結果として、マイエルが医学、とくに生理学に通じていたので、一般的理解に馴染まない表記が含有されているかもしれない。

明治時代初期における木村訳の意味

木村訳と原典とを比較照合してみると、どのような印象になろうか。結論を前倒しすれば、木村訳は1編3章「結婚について」と、2編1章「既に論じた点で、どこで小生が観察した問題になるのか、本能だけで人間についての再生産行動を取り扱わねばならないか」とを基礎としたかなり大味な抄訳となっているように見受けられる。とりわけ、『初篇』はその色合いが濃厚である。『二篇』の方も、確かに、2編2章Aや3編に盛られている要素にも時として目配りされてはいるけれども、専ら、上の2つの章への目線から適宜抜粋している感が否めない。いずれにせよ、木村の訳書は忠実な全訳ではない、随意による抄出、編集に基づいた訳文となっていると大約できよう。

では、その時の木村の意図は奈辺にあったと推察できようか。家の後継者の確保を第一にした明治民法典がドイツ民法典第一草案にならって1898年6月に成立する以前であったことを思い起こさねばならない。婚姻の成立をめぐっては、「法律婚（届出）主義」によるか、「事実婚主義」に基づくか、この両論が並び立っていたのである。事実上の婚姻を認めた司法省丁第46号達が出された1879年は、まさにその真っ只中にあり、結婚の戸籍（親族単位での戸籍制度は1871年の創設）への登記のみを婚姻の成立要件とした1877年太政官第209号達とは相対立していた。

明治期に入るまで、庶民については、親族や地域の権力者が、また武士の結婚に関しては、幕府が許認可権を持っていた。隠れキリシタンを禁圧するために、幕府が1640年並びに1664年に各領主へ作成を命じた宗門改



左より穂積陳重、富井政章、梅謙次郎　民法・商法施行100周年記念初日カバー（平成11年7月）

『婚姻新論初篇』国立国会図書館蔵　1878年

帳（仏教徒である証明、町村毎の記載で、家族構成や年齢が分かる）に馴化していた人々には、国家が管理、掌握する戸籍への届出など、お門違いであったに違いない［例えば、遠藤正敬『戸籍と無戸籍』人文書院、2017年、40,158-9、及び4章］。そんな最中に、木村はこう訳述しているのである、すなわち、「婚姻なるものは男女夫婦となり子孫を繁殖し之を教育せん為め互に親睦し生涯相離れさる所の約となしその礼式を行ふというなり、而して其婚姻を為すときは之かため設くるところの民法の規律に従ひ約を為し宗教の法則に依て式を行ひ以てその結約を堅固するなり」（『初篇』23、また56、64も参照）と。嚙み砕くなら、木村の訳書はフランスの「男女戯着する者」（同89、91、93）は「民法と宗教の規律」（『初篇』95、96、また57も参照）の下で結婚していると繰り返し紹介しているのである。付け加えるなら、「開国の人民」（『初篇』39）であるなら、「一夫一婦」（『初篇』41）で「婚姻せすして交接するの非及ひ邪婬は受朶せさる…婚礼の禮なくして男女の交わりを為すは罪なり」（『二篇』1）と訳述して、正式な婚姻外での「不正の交接」（『二篇』3）と厳に戒め、1873年1月18日の太政官第21号が提出した私生児（妻妾以外の婦女から生まれた婚姻外の子）問題にも一石を投じてもいるのである。

言い換えるなら、旧来の西欧社会では、男女が教会において結婚の秘蹟（サクラメント：男女が互いに、生涯にわたる愛と忠実を約束し、相互に助け合いながら、子どもを出産し養育し、家庭共同体を築いていく）を受ける宗教婚主義、いわゆる「カノン法上の結婚」が支配的となっていた。それに対し日本では、仏教にそった大抵の伝統的な祝言が本人の宅で挙げられてきた。このゆえに、不平等条約の改正（治外法権の撤廃・関税自主権の回復）を目指した明治政府は、ヨーロッパ諸国もその法制の範としてきたフランス法を参考にしたものの、こと結婚式に関する規定は馴染まず、結局、男児における均分相続や結婚の不解消を盛り込んでいたナポレオン法典（1804年）からは届出婚主義のみを取り入れようと試みたのである。しかしこの議案も1893年5月に延期され、最終的には潰えていく。多言の要なく、こうした潮流はカトリック教に共鳴的であった木村には虚しく映ったに違いない。

なぜ婚姻新論の訳本を取り上げたのか

もちろん、筆者の起筆の契機は本著が木村による翻訳書の1つであったからである。しかしそれにもまして、本著の原文表紙には、ガルニエ

(Joseph Garner,1813-81,2版p.54,5版p.172)らによるマルサス(Thomas Robert Malthus,1766-1834:訳本は「マルチュス」と音声表記、『初篇』94、『二篇』73)の仏訳書5版『人口論』(1845年、パリ・ギョーマン社)からの抄録が転載されていたからである。それは、「徳は創造主が我々の支配下に置いた一般的材料から人間幸福の最大量を引き出すこととして存する。また人間の自然的衝動自体はすべて善とみなされ、ただその結果によって見分けられるべきである。」という文言である。それに、マイエルは前言の中で、私の手引きになったのはマルサスの『人口論』であり、それは不要な部分を含んでいるものの、それ以上の傑作を見出しえないと告白、絶賛しているからである(2版p.27、4版p.18)。この意味では、自らをマルサシアン(Malthusien)と呼称されても良いとまで言っている(2版p.18、4版p.12)。とくに、法定結婚年齢(当時の仏では、男18歳、女15歳、『二篇』13)を超えた若き男女が自立できないまま、性急な結婚に走ることなく、かつその独身期間も純潔(性欲の自制)を保持していくことを強く切望した。この末に、例えば、33歳の男と26歳の女との婚姻が最多産をもたらすと解する(『二篇』18)。紛れもなく、この原型はマルサス『人口論』が強調してやまなかった「道徳的抑制」に見出されるものであり、結婚後の避妊への懐疑についても両者は一致している。

こうした中で、木村が「老男と處女との婚姻」(『初篇』6章)、「人老少に依り戀情の厚薄なきを論す」(『初篇』19章)、「男女交媾する者と為せる者と年壽の長短比較を論す」(『二篇』2章)、及び「老いて生産する夫婦の年齢を論す」(『二篇』4章)を訳載しているのには、興味が引かれる。なぜなら、木村はフランスからの帰国した際の86年5月18日に自宅(赤坂区青山南町2丁目63番地)に宿泊し、酒・肴を楽しんでいるけれども、その際に(養)母のみが接待にあたっているからである。つまり、当時の木村は未婚であったと推測されるのである。例を引くなら、フランス留学時に同部屋暮らしを送り、5月18日にも木村宅に同宿した医師・高松凌雲(1836-1916)は34歳で、また渡仏の際に木村が京都の洋学塾を託した西周(1829-97)は31歳で結婚していることを勘案するなら、36歳を過ぎた未婚者・木村は不可解に思える。ことによると、生涯独身者であったかもしれない。ともあれ、木村は老男による結婚や子作りに只ならぬ関心を寄せていたと推される。

その他、母親の授乳期間を1.5年と見積もっている点(『二篇』21)にも目が落ちる。周知のように、この期間は避妊効果を見込める時期であり、内外でも経験則として流布、意識されていたからである。訳書には、「姙娠中及び乳を飲ましむる間は交接するを悪しとす」(『初篇』76)とある。この所論は蔑ろにできない。というのも、乳母制度が普及していたフランスにおいて、これはC.ルードン(1801-44)が提起していた「3年授乳の[避妊]方法」に対置するものであり、マイエルがP.J.プルードン(1809-65)の『経済的矛盾の体系』(1846年)に含有されている「4人の子を持つ母親に16年間の奴隷状態を強いる」ものという所見に賛同していたことを物語っているからである(5版p.29,36,123,133n)。

いまもし4版『人口論』(1807年)に典拠を置いた大島貞益(1845-1914)訳『馬爾丟斯人口論要略全』が1877年に公刊された事実を思い浮かべるなら、5版『人口論』(1817年)を云々している木村訳についても、また、その先見の明、畏るべしと帰結するのが穏当と言えるであろう。

特別寄稿

山崎を離れて三十年の節目に

金沢大学ナノマテリアル研究所教授
辛川　誠

はじめに

筆者は伊沢川の上流、山崎町上牧谷の出身で、現在は石川県金沢市に所在する金沢大学（写真）に勤務しております。金沢大学は一九九〇年代初頭までは金沢城内にその一部機関（大学本部、法文、教育、理の三学部）を有した大学でしたが、一九九〇年代中頃から現在の金沢市郊外に移築され、二〇〇〇年代初頭に移築が完了し、現在の場所になって二十年程度になるそうです。筆者は二〇一六年に金沢大学に赴任しました。この際、上記の移築経緯を聞いて少し残念に感じました。お城の中に大学があるのは世界的にも稀（ドイツ・ハイデルベルク大と以前の金沢大だけ）だったので、もったいないと思いましたし、もう一度城に戻せばいいのにとひそかに思っています。しかし現在は、広大な敷地に余裕を持って建物が配置されていて圧倒されるのですが、離れている建物の間の通路は屋根があるか地下を通ることで雨や雪の日でも傘なしで移動できるという、とても便利な造りになっています。新しい特徴かもしれません。また、実験室が外気の影響を受けないように建物の中央に配置されているのも使用者からすればありがたい構造です。

筆者は中学生くらいまで地元を離れて何かをしようという思いはなく、高校卒業とともに就職することは一般的な進路だと思っていました。進学して違う場所で生活することはなかったし、機会があるならそれもありだと思うくらいのものでした。それが当時の主流な考え方だったように認識していますが、現在は進学のため他都市へいくことが多いのでは？推測します。どちらが良いかというのではなく、よく言われるように、「若いうちの苦労は・・」というのはあった方が後に役立つことが多いと思います。その点で他都市へ行って生活することは有意義である場合が多いと思いますし、さらに学ぶことで思いもよらない進路を開く機会に巡り合うことがあります。

さて、筆者は学生だった時代も含め、大学に関係してざっくり三十年になります。途

写真　金沢大学角間キャンパス（北エリア方面、2023年初秋）

中、公務員や国立研究所のポスドク（任期のある研究員）だったこともあります。これは中学生までの思考には全くなかった道のりで、不思議ですらあります。たまたま地元を離れる機会があって、その時々のチャンスや出会いに恵まれたことにつきますが、我々は団塊ジュニアの後期にあたり何をするにも同世代が多く競争の時代でした。そういう時代に活路を外へ見出すのは良かったのかもしれないと思ったりしています。

今は少子化で都市部はともかく、地方は人口減少対策が切迫した課題だと思われます。若い人には期待したいところですが、地元に留め置くことは将来への投資にはなりません。未来ある十代は今こそ地元を離れ、いろいろと比較判断できる経験と知識を積み上げ、その中の志のあるものが地元で活躍してほしいと願います。そのときは、古いものを残しながら、風情や趣のある町を育成してほしいと思います。日本はどこへ行っても同じような、均質化された景色なので、風情などの特色へつながるものは財産として活用するのがよいと思います。

前置きが長くなりましたが、高校を出てからの進路のうち、私が説明できるとすれば長く関わっている大学のことや博士のキャリア形成ぐらいですので、その辺の詳細を中学・高校生の参考になればという目的で書きます。

大学・大学院の就学期間と学生の仕事

大学入試に合格してそれぞれ大学へと進学し、四年の学業を修め卒業し就職する道は、高校生が持つ一般的なイメージでしょう。二十年前くらいなら大学生の多くはこの道でした。現在は大学院修了（大学院からは卒業のことを修了と称する）が理系においては一般的で、高学歴化がすすんでいます。企業も四年（学部）卒業ではなく、主要な部署には大学院修了者を採用する傾向にあります。この傾向は今後も進んでいくと思われ、一部では博士修了が必要な場合もあります。

大学学部での研究室配属

ここで大学から大学院について、図に就学期間を示します。先ほどふれたように大学は一般的に四年（短大や医学部を除く）で卒業となります。大まかには一年から三年は講義中心で、理系では二年から実験科目が加わりますが、講義中心に変わりはありません。この間、資格に必要な単位も履修することが可能で、理系学部だと中学・高校の数学や理科教諭の免許が取得できます。卒業論文の単位を取得するため、四年生になると研究室に配属され未知なる現象を見出すための実験に取り組むことになります。研究室は教授が主宰し、特定のテーマ（学術的な課題）を研究する集団で、実験室と教員・学生の居室からなります。講義扱いの実験では結果が分かっていることを追体験し考える訓練をしますが、研究室での実験は未知の現象の発見なので答えはありません。

四年生は各自研究テーマを所属する担当教員から与えられ、それを受けて各自が実験計画を考え、解き明かしたい現象について測定や分析を行い、現象の解明を目指します。集大成として卒業論文発表の場が設けられ、大学によって異なるものの、結果を発表して同じ学科の教

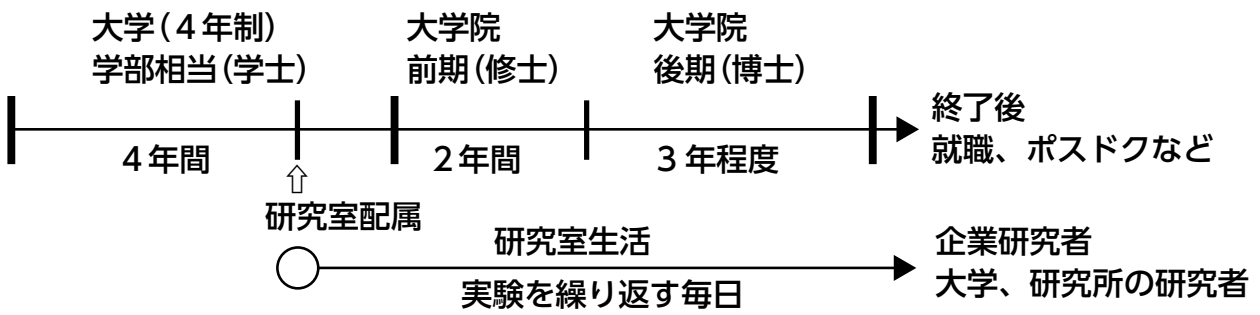


図　大学・大学院の就学期間とその後

員・学生からの質問に答えて合格となります。実験して結果をまとめ、発表して議論するという一連の過程を研究室で学びます。

近年、卒業論文の単位が選択化していることもあるので、卒業論文を選択しない場合は四年で卒業すると講義中心の大学生活となります。この場合技術的な習得がなく、技術を求める企業は四年生よりも修士課程修了の学生を優先して採用することになります。

大学院修士課程

四年卒業後の進学先に大学院があります。修士課程は大学院の前期に相当し、二年で修士論文を含むいくつかの単位を取得します。修士論文では卒業論文以上の科学的発見や現象の解明を求められ、多くは学術誌にその新規性と根拠を論じる論文として発表されます。この論文の積み重ねが大学や研究機関に求められています。研究費の大半は税金で賄われるため、論文発表は成果の還元が目的で、研究活動は知的好奇心が根底にあります。

世界では日々数百以上の論文が発表されていて、未知の現象を少しずつ解明し、一歩にも満たないかもしれない前進をつづけています。これらは比較という極めて単純な判断で評価され、どろくさい作業の積み上げです。ノーベル賞のような大きな成果はこの積み重ねの結果で、一朝一夕では得られないからこそ名誉ある賞です。科学者はこの栄誉を目指し、地道に成果を積み上げているのかもしれません。

大学院博士課程

話を戻して、大学院の前半を無事修了すれば次は博士課程です。博士課程は大学院の後期課程に相当します。「博士（ハカセ）」の学位は後期課程を修了することによって授与されます。学士から修士に格付けがあるとすれば、博士は修士よりも数段上に位置します。修士は時限的な単位で修了できますが、博士は先の学術誌に論文が掲載されなければ学位を与えられません。近年ではそこまで厳しいことは強いられないようになりつつありますが、論文を書けない科学者がその後研究者として自立した研究を続けられないことはよくあることです。「若いうちの苦労は・・」がここで発揮されます。苦労を受け入れ、それを礎にする気概があれば、この過程を楽しく過ごせますし、そういう思考がこの段階では必須であるかのように思われます。

この段階では思考することが重要で、常に得られた結果について「考えつくす」作業を繰り返します。実験を計画し実行して結果を得るということは単純な作業です。計画した実験では結果は想定されていますが、むしろ想定されなかった未知の結果が得られることの方が現場では価値があります。この点は一般的には疑問を持たれることがあるかもしれませんが、人が想像する範疇で起きる事象よりも、人の想像に反する結果や反応が起きるのが自然科学ですので、筆者はいつも想像に反する結果を実験に期待しています。もちろんその結果は再現性があるもので、だれが行っても同じになることが重要です。世界中の誰が行っても、同じ結果が得られることは自然科学の摂理で、この世の取り扱い説明書に記載された事項と言えます。この説明書をつむぎ出すことがすべての研究者に求められていて、大学や国の研究所の仕事です。

実験を繰り返し、確固たる自信をもって得られた結果を論文にまとめ、発表できたら博士の学位が授与されます。学術誌に掲載される論文は所定の審査を経て公表されています。審査は同じ研究分野の研究者に学術誌に掲載される前に送付され、実験条件、結果の再現性、結果の評価に関する妥当性など、客観的事実にもとづいた第三者の目線で吟味されます。

この過程を経て論文は学術誌に掲載されます。この審査を経た論文は人類の知的財産として共有されます。ささいな進歩であっても、それは同様で人類の知的進歩です。

博士後のキャリア

博士を授与された後は企業の研究者として研究開発の道に進むか、大学や国の研究所に勤めることを目指して、任期付の研究職（ポスドクと呼ばれる）で経験と実績を積むか、の道となります。現在では理系の大学や国の研究所に就くには博士の学位は必須ですので、博士課程修了までの道をたどることになるでしょう。また、博士取得者は海外の研究所への求職も可能なので、ポスドクとして数年修行に行くことも楽しい選択肢になります。地元どころか日本を離れて異文化に触れると新しい発見があるものです。そこまでいけば、景色も違うし考え方も多様になり、よりよい研究者生活が送れるでしょう。近年は少子化の影響もあり、博士課程への進学者が減少してきています。対策として近年では博士課程進学者に奨学金ではなく、返還不要な給付型の資金援助が増えているのに加えて授業料免除もあるなど、手厚いサポート制度があるので、将来を見据えて博士課程へ進学して欲しいと願います。

結び

地元を離れることで自分自身と向き合い、成長する機会が得られます。大学や大学院での勉学は、専門性を高める良い機会です。新しい環境で全力を尽くすことで、自分自身の可能性に気付くこともできます。そうやって学びを地元に還元し、発展に貢献して欲しいと思います。勉学で身につけた知識や技能は、地元地域の発展のために生かすことが可能です。コミュニティが必要としている課題を見つけ、専門性を活かして解決策を提案することにも繋がっていきます。困難もあるかもしれませんが、挑戦することで自分らしい人生を切り開いていけると信じています。ちょっとでも大学・大学院の中身が見えれば、心理的なハードルが下がると思いますので、若い世代の参考になれば幸いです。

略歴

1974年　山崎町上牧谷生まれ
1986年　伊水小学校卒業、旧蔦沢中学校（1年通った）後、統合した山崎東中学校卒業、1993年山崎高等学校卒業
1997年　鳥取大学農学部を卒業、1999年鳥取大学大学院農学研究科修士課程を修了
2003年　京都大学大学院農学研究科博士後期課程を修了、博士（農学）（京都大学）を取得。
2003年　和歌山県工業技術センターに勤務、2006年産業技術総合研究所光技術研究部門にてポスドクで研究に従事。
2007年より大阪大学産業科学研究所助教、その間2013年10月～12月ベルギー Interuniversity Microelectronics Centre（IMEC）客員研究員で駐在し、研究に励む。
2016年より金沢大学新学術創成研究機構准教授、2016年～2018年の間、大阪大学産業科学研究所招聘准教授、
2018年より金沢大学ナノマテリアル研究所准教授、2021年金沢大学ナノマテリアル研究所教授に昇任し、現在に至る。

短歌

追憶
復員兵と声を失った妹

一葉会　山崎智絵

太平洋戦争で日本が敗戦国となった翌年の事である。その日は九月も終りに近く肌寒い朝であった。

自転車で仕事に出て行った夫がすぐ引き返してきて「腹をすかして動けなくなっている人がいる。何か食べる物を持って行ってくれ」と早口で言い、後は呟くように「腹が減るほど辛い事はない」と言いながら再び出て行った。夫の言葉には真に迫るものがあり、私は胸を衝かれ何の考えもないまま急いで道路に出ると、それと見える若い男女が近くの家の縁に腰を下ろしていた。

復員服を着た若い男性はそのズボンの膝に置いた両手で頭を支え俯(うつむ)いていた。その傍らの黒っぽいモンペ姿の少女は長い髪を後で結えて背中に垂らし、小さな顔は日焼けしていたが、その黒い瞳は遠く遥かなものを見ている様で印象的であった。深い恐怖や絶望の淵から救い出された安堵感がひととき飢えや疲れを遠ざけたのか、少女の細い体は穏やかな雰囲気が感じられた。

私はその時何と声を掛けたのか全く覚えていないが男性は低い声でとぎれがちながら多くを話した。

「三週間前に外地より神戸に帰還したが、家は無く焼け野原になっていた。家人の安否が気になり知人を尋ね歩くうちに、妹を見たという人があり孤児の集まっている所を捜すのに十日余りを費やした。やっと見つけた収容所で名前を呼ぶとすぐ側に来た。嬉しかった。何かと話しかけたが返事は返ってこない。妹は声を出す術(すべ)を忘れてしまっていた。十五歳（当時は数え年）になっているはずなのに体もこんなに小さい。寒くならないうちに何とかせねばと思い、昔親に連れられて行った事のある鳥取の親類を頼るしかなく一昨日線路伝いに姫路まで来て野宿し、昨日は山崎を目指して林田で昼になり、藁草履二足とパン二箇を図嚢(ずのう)と交換した。安志に川があったので妹の髪を洗い手足を洗った。妹も疲れていたので神社の軒で眠り、今朝早く安志峠を越えてここ(須賀沢)まで来たが昨日の昼から」と言いかけて声を呑んだ。

「ちょっと待ってね」と言い置いて私は一度家に帰り間借り六畳一間の天井を見上げ、この感情の昂ぶりを抑えようと、しばらく立っていた。

五合炊きの釜に夫の弁当の残りが大匙(さじ)一杯ほど残してある。それを雑炊にして食べるのが、私の毎日の昼食である。野菜のない時はうすい麦飯の粥だけとなり他に食べる物は何もない。あの二人に大匙一杯の麦飯ではあまりにも少ない。近所の農家に頼んでみよう。頭の中でいろいろな想いが交錯した。結局思いつくままに夫が復員した時に持ち帰った飯盒、水筒、肩に掛けるズックの鞄を持って二人の所に走った。

すばやくそれを二人の側に置き、「私の家は農家でないので残念だが食べる物をあげられない。これは荷物になるがなるべく手放さず、農家の人に理由を話せばたとえ一握りの米麦や豆など頂く事もあるだろう。その時に使ってほしい。人里はなれた山中など長い旅になるだろうから」気がつくと弟にでも言うような口調になっていた。

兵隊さんは子供の時からの憧れであった。十九歳の私より若くその人はまだ十代の元少年兵だったのだ。（その時思い出したのは十七歳で戦死した級友が三人もいる事である。）

黙って動かぬ兄妹をそのままにして、私は必死で親しい三軒の農家を訪ねたが、農家の朝は早く、みな留守であった。仕方なく道路に出て見ると二人の姿はそこにはなく、長く続く竹藪のほとりを行く小さな姿が見えた。やがて後から来たバスの白い土埃に兄妹の姿は包まれて見えなくなってしまった。

今年の正月にあった能登震災を見るにつけ「生きていてほしい」と願った戦後間もない昔を思い出した。あの衰弱した体で見ず知らずの私に話し続けた元少年兵は家族に温かく迎えられると夢に見ていただろう。焼野原に野宿しながら知人を尋ね歩き、やっと見つけた妹は物言わぬ人になっていた。その三週間に親身に話を聞いてくれる人は誰一人なかったのだろう。

震災で大切な人を失い、日常の全てを奪われた人の慟哭(どうこく)の声に涙した時、やっと彼を理解することができた。食にも人にも彼は飢えていたのだ。

戦争は人を助けない。真実を国民に知らせない。人を犯罪者にする。

どうぞ、一度きりの人生を大切に

してください。何時までもこの平和が続きますように祈りを込めてこの稿を終ります。

戦わぬ国になりたる歓びにラジオはリンゴの唄をながせり　智絵

やまさき文化大学短歌部詠草

名を呼べは「アイ」と答へてたらちねの母に抱かれミルク飲む児や
一休み腰を下ろせば菜の花に止まりし蝶がひらり飛び立つ
コロナ禍でしばし途絶えし村祭り今年は子供神輿を練りぬ　大部　正勝

久々の帰省の嫁と厨房に並んでつくる我が家の雑煮
春眠の大地を刻むトラクターおこせし土の匂い懐かし
夫の死を「あっけなかった」という友に長き看取りを労わる術なし　竹添　和子

春雨でもやいし山の霧うすれこぶしの白き花のうかびぬ
城跡に妻と登り居てながむれば甍波うち出石は初夏へ
累々と枝もたわむる柿の実の橙に色なす花御所の里　中谷　賢二

五枚目の喪中葉書は家族から亡き人思う外は木枯らし
時おりに顔をしかめて目を開ける今母は三途の川の岸に立つかも
一億年のタイムトラベル山里に丹波竜の親子が遊ぶ　福元　千代子

強がりを言ってはみても老いる身に明日へと絡む隠せぬ疲れ
年の瀬の迫りて心せわしきに叶わぬ夢もなお捨てかねつ
流れては帰ることなき水を追い光求めて心歩める　森元　満子

寂しくて打ちひしがれて立てぬときふと歌を詠む杖の代わりに
切り餅の食べ方ひとつみるにつけこだわり抜けぬ父母の面影
里帰り元日朝は父からの催促電話に息を乱して　高橋　利典

一葉会詠草

大勢の中で孤独を感じいつかの記憶こそ吾の思春期
播州一献、三笑かたむけ　夕べの語らい町家のいろり辺
歌詞の意味知ればジリオラと同じ年ノノレタノノレタ固き青き実　植木　洋子

伊沢川ながれの岸の茂みより湧き出づるごと蛍とびたつ
秋の陽の落ちたる野道歩きおり金木犀の香に包まれて
亡き母の生き方拒みし吾なれど何時しか似たる道を歩めり　武野　寿々代

コルセット胸よりはずし湯に沈むかかる幸せ長く知らざりき
台風の予報のありて雨やまず食後の薬三種を飲みぬ
名は絃世奈良で生まれし三人目の曽孫よ世界を紘ぐ人となれ　谷林　立身

椎の木の洞に若木の芽吹きたり闇斎神社の杜ふくらみぬ
田植機を操る老いの助手席はひたすら前見る童乗りいる
雑草を引けば丈より根の長く勢う力をまざまざと見す　前田　幸子

崩れ易く地肌の見ゆる背戸の山　雨ふる夜は音に敏かり
隣り合う稲穂の色には勝てないよ遅れ咲きけるくちなしの花
山の道杣道　野の道たんぼ道　どの道行きても母に会えそう　森下　逮子

独り居の翁の窓のあかり消え古りし風鈴が風ふけば鳴る
元気でね又会いましょとハグされぬ難波の女の胸あたたかく
どの位置に立ちても見ゆる山並のこの安けさに重ねゆく日々　山崎　智絵

俳句

山崎俳句協会

室津港へ春の吟行　四月十日

青嶺句会　中尾　富子

四月十日、すっかり春めいてきた好季節、恒例の吟行へ。海と山に囲まれた港町室津を選びました。

朝、防災センターをマイクロバスで出発、昼前には室津港に着き、大漁旗のはためく海岸沿いを各自句づくりをしながら散策。

・楽しみに待った吟行春日和　久　子

・春昼や甍煌く漁師町　チエノ

室津は古く江戸時代の参勤交代で西国大名の上陸地として栄えた町で石畳の路地を歩くと往時の賑わいが偲ばれます。

散策のあと昼食と句会会場を近くの老舗旅館にお借りしました。昼食の魚料理も美味しく、司馬遼太郎をはじめ多くの文豪に愛された旅館からの眺めは、室津港を一望でき、海を見ることの少ない私たちは感嘆の声をあげました。

・小豆島遠くて近し花は葉に　良　子

・穏やかな海を望みて春の膳　美保子

句会を終え道の駅みつへ。店内は瀬戸内海で水揚げされたうろこも光る鮮度の良い魚介類や地元の野菜も豊富に揃っていました。

・子に跳べて母には跳べぬ田螺かな　ゆ　き

・山つつじ今を盛りに迎えけり　とみこ

室津漁港は「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」に選定されるほど美しい漁港、次回は牡蠣のシーズンに訪れたいなと思いつつ帰路につきました。

当日欠席者の俳句

・思いでにひたり母校の花の下　緑　山

・山吹や入日とろとろ渓谷に　幸　子

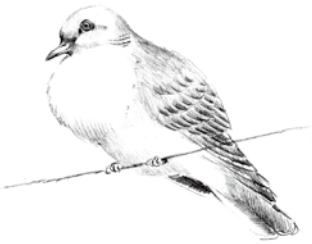
・旅パンフ箱に収めつ春惜しむ　駆　雲

故 和田疎人先生秀句

・マスク汚れ期待はずれの人なりし

・マスクさと取り反論を矢継ぎ早や

・手袋をはきつつも意の定まらず



青嶺句会詠草

・そばに住みうすくなりても盆の客

・野菊晴れ九十路の散歩あやかられ　門積　緑山

・水温み畑に人影戻りくる

・帰省子の四方山話し尽きぬ夜　杉山美保子

・盆供養母の遺影もほほえみて

・焼芋屋過疎の郷にも笛高し　若松　幸子

・みくじ結ふ母子の絆千代の春

・お礼こめ精魂こめて寒の肥　田中　良子

・陽を浴びてきらきら光る冬紅葉

・秋の雲天女のように空で舞い　島本　久子

・田の案山子きょうも元気か空青し

・長ぐつをはきたし子らは梅雨嬉し　中尾とみこ

・にぎやかに子等の声洩れ柚子の風呂

・荒東風や軒に魚干す漁師町　鳥羽チエノ

・夏の蝶睦びて友の忌命日

・野も山も日毎ふくらむ卯月かな　三浦　ゆき

・古案山子傾ぎてもなお田を守る

・欠伸して一人立ち去る日向ぼこ　原田　駆雲

山脈句会詠草

・大の字に干されて揺るる鵙の贄
・「断腸亭日乗」愛読日記買ふ　京屋　伊助
・みはるかす群青の波鰆東風
・明の星野猪は山へと去ぬ頃か　重田　陽子
・恙無く過ごせし日々や歳の暮
・未知の日々健やかであれ初暦　谷口　昭子
・せり出して厨をのぞく春の雪
・皺の手をピンクに染める梅を干す　鳥羽チエノ
・紙切れに亡夫の飢えの句敗戦日
・お経浴び線香浴びる冬の旅　西田　宣子
・白障子夕陽迎えて影睦む
・風花や銀の星屑遊び来る　三浦　ゆき
・脈々と世代つながれ秋祭
・酒林軒に釣られて紅葉晴れ　高井　麗子
・目鼻まで似たもの夫婦おでん鍋
・靴音にわくわくするよ踏む落ち葉　岡田　福代
・初ほたる追うて二歳のくつが鳴る
・廃村の火の見櫓の蔦の赤　澤田　豊子
・夕暮れの水面に映る里紅葉
・シンシンと星降る夜の神無月　古谷　晃子
・白菜の漬物旨し夕の膳
・縁側で友とたわいなし小春の日　清水　省三

五色俳句会詠草
「五色の春秋」

・添書きの力のもどる賀状受く
・餅花の枝垂れ華やぐ客間かな　角野　慶子
・作陶の絵付けほっこり梅の花
・梅林に一筋の日矢届きけり　中田　文子
・まなかひに群青の波鰆東風
・馬酔木より低き朽ち石道標　重田　陽子
・春時雨すこし濃いめの紅茶かな
・花冷えや梢を叩く風の音　冨井　幸子
・走り茶のやすらぎを汲む昼下がり
・白南風や連山明かるうしてをりぬ　角野桂治郎
・帰路の坂老鶯山へ戻るころ
・畑隅に凛然と咲く立葵　梶尾キヌヨ
・たかんなの皮が色増す噴井かな
・徳利抱く羅漢の多き納涼園　笠原　了
・朝顔に水彩の精宿り居る
・髪切り虫自慢の髭を掲げ翔ぶ　野本　夏遊
・明日何か良きこと予感冬の虹
・杭を打つ音甲高く十二月　福元　敦子

やまさき文化大学俳句部詠草

・朝寒の窓に結露や玉子溶く
・酒蔵のランチ四人の着ぶくれて　金山　英子
・うららかや予期せぬ文の喜寿祝う
・初春のにぎわい隅へ二人鍋　坂井　惠子
・蒼天や青葉の山の深呼吸
・地球てふ豊かな星や蚯蚓出づ　里見　和樽
・暗がりに人の声聞く初詣
・皆の顔揃いにぎやかとんど焼　清水　省三
・秋の声夜明の庭の其所彼所
・石蕗の花朝な夕なに愛でる日々　髙井　智代
・千両や無事出産の便りあり
・ときめくやそっと開きし初みくじ　萩原　恵子
・初景色天変地異の和と光
・恵方詣老いと灯りの重み増し　平形　照美
・戦ある国も日本も冬満月
・久々の雨に土の香春兆す　宗平　圭司
・追悼す今日はぬる目の熱燗で
・銀色の闇へ目をやる寒造　宗平　真実

トロンボーンと私

宍粟市吹奏楽団
松山洋士

私がトロンボーンという楽器に出会ったのは、中学校に入学して新入生歓迎の吹奏楽部の演奏を初めて聴いた時です。キラキラ輝いていて、何か解らないけど伸ばしたり縮めたりしているのが妙に格好良くて、「この楽器吹いてみたい」と思ったものです。吹奏楽部に入部する際、色々な楽器を見せてもらった上で希望楽器をトロンボーンで出しました。

しかし、その時には何だかわからないうちに他の楽器（トランペット）に決まってしまっていて、そのままトランペットをやる事になりました。元々小学校のリコーダーなど楽器を吹く事は好きだったので、楽器は違ってもだんだん音が出せるようになっていくのがすごく楽しかった記憶があります。

高校も引き続きトランペットを担当しましたが、大学の吹奏楽団に入る際に再びトロンボーンを演奏する機会が巡ってきました。トランペットパートの人数が多く、誰かが他のパートに移らないといけなかったのです。そこで希望を出し、やっと中学生の時の希望楽器トロンボーンをする事が出来ました。

トランペットとトロンボーンは、同じ金管楽器（唇を振動させて音を出す）ですが、一番違うのはあの伸び縮みするスライドという部分です。印も何もついておらず、伸ばすのは自分の感覚です。良く言えば自由。悪く言えば適当。でもこの楽器にしか出来ない事も沢山あり、難しいですが楽しいです。

私は今、宍粟市吹奏楽団で活動しています。市外在住ですが職場が山崎のため、吹奏楽団設立時に入団しました。大学を出てから全く楽器に触れておらず、約十五年のブランクを経て、全く知り合いなどいない中での活動再開でしたが、宍粟の皆さんは本当に優しく接してくださいました。まだまだ下手くそですが、続けられる限りはこの楽器と接して行こうと思います。

活動と交流の再開

宍粟山崎手作り甲冑の会
代表　小林由佳子

令和五年は、コロナ感染症が五類へと移行し、私達の生活も感染前の日常を取り戻した感があります。今まで交流を重ねてきた「大多喜お城まつり」（千葉県大多喜町）や「姫路お城まつり」（姫路市）からも参加要請がありました。久しぶりの交流も含めて参加させていただきました。

また、地元でも「藤まつり」にあわせて子供武者行列を、「もみじまつり」には、総勢三〇人以上で賑やかに武者行列を開催させていただくことが出来ました。

いずれも、まちの賑わいづくりの一環と近世山崎の歴史などを参加者はもとより多くの方々にお伝え出来たことは、喜ばしい限りですが、開催にあたっては課題もあり今後検討していかなければとも考えております。一方、手作り甲冑教室は毎週月曜日に実施しており継続した活動を行っております。

最後に、みなが日常を取り戻し、その事を実感し始めた最中のお正月に発生した能登半島地震には、山崎断層を抱える地域に住んでいる住民として、改めて個々の災害対策の必要性を感じずにはいられません。一日も早い復興を願うと共に犠牲になられた方へ哀悼の意を表し原稿を終えます。

SDGsに取り組んで

新潮会
赤木達二

新潮会は一昨年で七十周年を迎えることができました。先輩諸氏のご尽力と皆様方のご協力のたまものと感謝いたします。

現在私達が取り組んでいます事業を少し紹介したいと思います。SDGs（持続可能な開発目標）に取り組むこととし、パーク&ライド駐車場の横にSDGsの森を作っていただきました。ご協力いただいた皆様に感謝いたします。SDGsとは二〇二〇年に日本を含む百九十三ヵ国の国連加盟国の合意のもとに採択された「世界規模の課題を解決する」ための十七の目標であります。

私達はSDGsの森に十七本の木を植樹し、一本一本に目標を掲げました。木は桜、もみじ、ハナミズキ、ヤマボウシ等です。ここに一から十七の目標を書いてみました。

①貧困をなくそう　②飢餓をゼロに　③すべての人に健康と福祉を　④質の高い教育をみんなに　⑤ジェンダー平等を実現しよう　⑥安全な水とトイレを世界中に　⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに　⑧働きがいも経済成長も　⑨産業と技術革新の基盤をつくろう　⑩人や国の不平等をなくそう　⑪住み続けられるまちづくりを　⑫つくる責任つかう責任　⑬気候変動に具体的な対策を　⑭海の豊かさを守ろう　⑮陸の豊かさも守ろう　⑯平和と公正をすべての人に　⑰パートナーシップで目標を達成しよう

以上の目標の中で私達ができる事から取り組むことにしました。一番から十七番まで会員の皆さんがそれぞれの思いを持って頑張っています。具体的には資源を大切にするため食べ物は残さないようにする（生ゴミ等を減らす）。材料を大事に扱うこと。小さなことに一人一人が取り組み、そして大きな力となり豊かな資源を生み出し住みよい環境となる。心豊かに、そして文化、教育、経済に取り組み、みんなが住んで良かったと思えるようにSDGsの目標に携わっていきたい。そんな気持ちで近況を書いてみました。今後とも皆様方のご協力とご指導をよろしくお願いいたします。

笑顔で民謡を！

山崎民謡連合会
内海真理子

新型コロナが五類感染症へと移行し、少しずつ世の中の動きも増えて参りました。

そんな中私は仕事を卒業し、あっという間に四年が過ぎました。怪我がきっかけで始めた民謡・三味線のお稽古も三年半余りとなりました。民謡のコンクール、各団体の発表会等も以前通りとなり、コロナ禍の間は中止となっていた介護施設や自治会・敬老会等への訪問演奏会も再開しました。とはいっても私はコロナ禍以前を知りません。

石田先生はじめ、「やまっ子会」の諸先輩方の民謡は、教室では聞いておりましたが、会場の客席から見ておりますと、その迫力には圧倒されるばかりです。

また私は、初めて何ヵ所もの施設を訪問し演奏いたしました。先輩方の曲目に合わせての扮装・演技も凝りに凝ったものでした。施設の皆様の笑顔、歓声を聞くことができました。ご存じの歌は一緒に歌ったり、踊ったりもしてもらいました。涙ぐむ方もおられました。

私も先輩方に並んで三味線を弾きました。誰かに喜んで頂く事の楽しさ・嬉しさは、以前では考えられないことです。四年前のあの時、よくぞ思い切って三味線を始めたものだと思います。

どちらの施設の職員様も、笑顔一杯で手厚く利用者様のお世話をなさっているお姿を拝見し、頭が下がる思いでありました。

最後になりますが、我々「やまっ子会」を温かく受け入れてくださり心よりお礼申し上げます。これからも笑顔で民謡の稽古をしていきたいと思います。

「秋のふれあい文化祭」
（11月3日）於：山崎文化会館

私が米寿を迎えた喜びとかなり昔の新入社員の思い出

山崎囲碁同好会
三宅　哲朗

昭和十一年生まれの私は、この令和五年に八十八才というおめでたい米寿を迎えることができました。

私にとってもなんとも信じられないような長い年月がいつの間にか過ぎていってこうなったわけですが、この文章を書くにあたり、我が生命がここまでの長年の生命を保ち続けてくれたことへの感謝の気持ちを忘れてはいけないと改めて思い直しております。

その過ぎ去った年月をなんとか思い出しながら振り返ってみますと、まず私がこの故郷山崎を飛び出したのは、県立山崎高校を卒業して和歌山大学経済学部へ入学したときでした。そこで四年間の学生生活を送り、いよいよ大阪の鉄鋼関係の商事会社に就職し、いっぱしの社会人となったわけです。

新しく受入側の会社はそのウブな未知数の社員に対して大阪商人の商売に対する心構えというか商売に向き合う根性を実践の商売から学び取るように社内での新人社員に対する教育期間のところでかなり力の入った説明がありました。

新人教育期間も終れば新人たちを各職場に配置です。私は営業会計という営業部隊の事務補助機関でした。

売上、仕入、入金、支払など一連の会計事務を受持ちます。この担当を二年やりました。三年目からいよいよ営業部隊に転進です。商社本来の販売が重要な部門でありますが、これ以後のこの部門の説明はかなりな量の説明を必要としますのでこれ以後の説明は申し訳ありませんがここで置かせていただきます。

高齢化と新型コロナに悩まされながらも…

川戸獅子保存会会長
山根　和成

四年ぶりに獅子舞を地元の方々に披露させて頂く事が出来ました。新型コロナの影響もあり三年間滞っていた獅子舞を令和五年十月川戸岩田神社の秋祭りにおいて奉納する事が出来たことを嬉しく思っております。

今から半世紀以上前に復活した川戸の獅子を、獅子保存会という名称の団体が主体となり、今日まで継承してまいりましたが、三年連続で舞わす事が出来なかったことは今回が初めてでした。

八月の下旬より約一ヵ月半の間、新型コロナ感染に怯えながらの練習が始まり、無事宵宮の日を迎えた時は正直ホッとしました。

ただ、舞わすことが出来たといっても完全な形ではなく、これまで全七演目だったところを四演目に縮小しての奉納でした。その蔭にはいくつかの理由がありますが、中でも獅子保存会への若い人たちの勧誘がなかなか進まず、会員の高齢化です。

そんな中、嬉しかった事は保護者さん達のご理解もあり、たくさんの踊り子（小学生以下の子供）たちの参加があったことでした。また、老朽化していた踊り子の飾り付け扇等を長時間を要して新調してくださった方等の協力もありました。

これから先、川戸の獅子舞がどんな方向に進んでいくのか、進んでいけばいいのか、まだ解決していませんがどんな形であれ継承されていく事を願わんばかりです。

五十周年によせて

宍粟美術協会
大東　千津子

お陰様で、令和六年に宍粟美術協会は五十周年を迎えます。

「十年ひと昔」といいますが、最近の世の中の移り変わりの速さから、「五年ひと昔」とも言われているようです。

五十年前はどんな世の中だったかと調べてみますと、一九七〇年代、高度経済成長期。大阪万博開催、第二次ベビーブーム、沖縄返還、カップヌードルの発売、マクドナルド一号店オープンなどなど。個人的には、私の保育園のお昼寝布団にはランランとカンカンのイラストが描かれており、友達とは「およげたいやきくん」を歌って踊っていました。（懐かしい）

そんな時代背景の中、伊藤一郎前宍粟美術協会長のご尊父である、伊藤親保様が発起人になり、第一回宍粟美術協会展は開催されました。

以来五十年、高齢化に伴い、会員数の減少は否めませんが、山崎美術協会との合併を経て、今日まで福岡久藏先生はじめ、大勢の方々のご尽力により活動が続いております。

芸術は人生を豊かにしてくれます。楽しさや感動、精神的な安らぎも得られます。

会の理念は「宍粟市の美術振興と文化の向上を図り、会員相互の親睦増進と各自の作品の向上を目的とした活動」です。

制作した作品を、展覧会に出展して講評や感想を頂いたり、他の方々の作品を鑑賞したりすることで、また次の作品への意欲が湧きます。

私は山崎美術協会からかれこれ二十年近くお世話になっていますが、人生が豊かになっていることは疑う余地がありません。

宍粟美術協会
インスタグラム

母娘共演で歌える喜び

宍粟市少年少女合唱団
緒方　加奈

私は「宍粟市少年少女合唱団」に所属しています。

〝少年少女合唱団〟なのになぜ大人の私が？と思われる方もあるかもしれません。

今は「宍粟市少年少女合唱団ファミリー」というかたちで娘たちと一緒に歌を歌っています。

コロナ渦の到来で練習も自粛、歌を歌うことができない、披露できるステージがない、そして団員は進級進学で減っていくばかり。ついに合唱団の小学生ジュニアメンバーが娘二人（当時一年生と三年生）だけになってしまいました。先生方もこの時ばかりはもう先が見えないと心を痛められたと思います。

二人だけなら練習に行きたくないとしぶる娘たちを横で見ていた私は、「それじゃお母さんも一緒に歌うから、歌を教えてよ」と娘たちにお願いしてみました。最初は恥ずかしがっていた娘たちもだんだん輪に入れてくれるようになり、かくいう私がいちばん喜び楽しみ、合唱のハーモニーの美しさに包まれ、ひとつになる一体感に感動をいただくという展開に。娘たちが一生懸命歌ったり踊ったり頑張っている姿をすぐ後ろで見ながら私も一緒に歌える、この恵まれた機会をいただけていることが私の人生のギフトになっています。

そして少しずつ団員も増え、またいったん卒業したけれど社会人になって戻ってきてくれる団員もありました。合唱団としてこのまま継続していくためにも年齢の枠を外そうという先生方の思いで今は「宍粟市少年少女合唱団ファミリー」として活動しています。ほんとに家族のような温かい合唱団です。

これからもみなさんに笑顔と元気をお届けできる合唱団として活躍していきたいと団員一同心をひとつにして日々の練習に励んでいますので、今後ともご支援よろしくお願いいたします。

今、想うこと

山崎邦楽の会
絵夢の会
岡本美穂

超高速で時が流れてゆきます。

私が箏と出会ったのは七歳の時、その時から半世紀の年月が経っていることになります。

小学生だった頃は週に一度のお稽古日が待ち遠しかったものです。いつの頃からでしょうか、こんなスピードで時が流れていくようになったのは。歳を重ねる毎にその速さも更に加速しているように感じます。そう思うのは子どもの頃と違い『ときめく事が少なくなったから』と聞いたことがあります。確かにそうかもしれません。新型コロナが大変な勢いで流行し始め行動制限が求められる情勢の中で還暦を迎え、先の見えないどんよりとした空気感の中で酷く歳をとった気分になったものです。

日々の生活においても、芸事においても目標を持つ事、刺激を受けることが大事だと今更ながら思っています。今の時代CDやユーチューブでもたくさんの音楽を聴くことは出来ますが、やはり生の音には力があります。

以前、神戸で開催された演奏会に足を運んだ時、見るからに高齢で失礼ながら尺八が吹けるのかしらと思えるご老人の演奏を聴く機会がありました。やはりその音は張りがあるでもなく朗々としたものではなかったのですが、何とも言い表せないしみじみと心に染み入るものだったのです。

一緒に行っていた人と思わず顔を見合わせたので、皆同じ衝撃を受けたと感じました。

そんな事もあったなと思い返し、歳を理由にもう今さらだとか、もう遅いかなと漠然とした物事にも諦めかけている自分に「今日が一番若いんだから」とエールを送りながらこれからの日々を進んで行きたいと思う今日この頃です。

鶴崎先生を偲ぶ

宍粟市謡曲同好会
鶴崎観和会
田中洋子

「えっ！」訃報を聞いたときは、耳を疑いました。もちろん先生もご高齢ではありましたが、それでもお元気な様子で月一回のお稽古日には一緒に謡の本を読み楽しんでおられました。たまたま十月のお稽古日には、私は用事があり欠席していましたので、本当に悔やまれました。

思い返せば、初めて先生のお宅に伺いお稽古をさせていただいたのが三十五才、あれから三十七年の月日が経ちました。その間、仕事もありよく怠けておりましたが、注意もされず「ひさしぶりやなぁ」といつも声をかけてくださいました。

また先生の奥様にも本当にお世話になりました。素謡・仕舞と先生から厳しく指導を受けている時、その通りに出来なくて困っていると、さりげなく横から救いの手をさしのべてくださり、私の気を楽にしてくださいました。そして春・秋の宍粟市謡曲同好会の発表の際には、奥様が落ち着いた仕舞をされ、それを見て私も落ち着いて舞うことができました。

本当にここまで来ることができたのは、厳しい中にも何度でも自信がつくまで繰り返し指導をしてくださった先生と、良き先輩であった奥様のおかげと思っております。

急に亡くなられたので、これからどうしようとあれこれ思いますが、好きな謡曲です。一人でも練習はできます。大きな声を出して練習したいと思います。

先生、聞いていてくださいね！

オカリナとの出会い

森の国オカリナフレンズ小鳩
加古　玖美子

六十才を迎えた近隣の同級生の新年会で、現在七十九才の夫が「還暦を機に皆で一緒に何かを始めよう！」と。「そうや、芙美ちゃんがオカリナしてるから、教えてもらおう。」

二〇〇〇年にテレマン楽器さんがフルート奏者の稲葉先生を迎えて始められていたオカリナ教室（オカリナフレンズ小鳩）に芙美ちゃんこと小畑さんが在籍されていたのです。

こうして同級生五人と主人の母や親戚の者と私も参加して、オカリナ同好会が始まりました。主人の母の洋装店チャームで月一回夜に練習したので、チャーミングバーズと名付けました。

三年程して、テレマン楽器の尾崎さんに教えに来て頂けるようになり、二〇〇八年に始まったオカリナフェスティバルに参加するようになりました。

テレマン楽器さんは三十五銘柄、約一千個程のオカリナを取り揃えておられ、この山崎町はオカリナの聖地と呼ばれています。

第一回のオカリナフェスティバルを山崎文化会館で開催されて以来、全国から参加希望があり、演奏者を抽選で決定する程になっています。

オカリナフレンズ小鳩を指導されていた稲葉先生が、結婚で東京へ行かれ、その後尾崎さんが指導されることになり、チャーミングバーズもオカリナフレンズ小鳩に入れて頂きました。

二十年近くなり、最初の同級生の仲間も辞めたり、亡くなったりして、二人になってしまいましたが、現在はオカリナフレンズ小鳩の仲間十人程で、三重奏から五重奏を練習しています。オカリナは土を焼いて作られた手作りの楽器なので、音を合わせるのが難しいですが、尾崎さんが優しい言葉で指導してくださるので、笑いの絶えない雰囲気で練習しています。

山崎のオカリナ人口をもっと増やしたいと願っています。オカリナを吹いてみたい方は、是非声を掛けてくださいね。

山崎八幡神社の能舞台に立って

山崎日本舞踊の会
岸本幸子こと
坂東　寿賀幸

山崎文化協会よりお声がけいただき、山崎八幡神社能舞台に出演させていただきました。能舞台は、元禄時代に建立され、山崎藩主本多公の奉納薪能が催行された由緒ある舞台です。

平成十九年に町内篤志家の寄進に依り大改修された立派な舞台に立たせていただきました。

これまで能楽を観る機会はありましたが、その舞台に出演できるなんて。ましてや氏神様です。山崎文化協会にお誘いを受けたときに私がお稽古していた曲調が「新曲高砂の浦」というおめでたい曲でした。ちょうど能舞台にぴったりの曲でしたので、すぐ立候補しました。

十一月十九日もみじ祭りが開催される中、橋掛から曲に合わせ厳かに出演しました。本舞台に入ると、正面に八幡神社の本殿、そしてその後ろには神社の森が広がっているのが見えました。大きな氏神様の懐に包み込まれたような安心の心で緊張から解き放たれ、曲に乗り楽しく踊ることができました。お客さんはまばらでしたが、私は能舞台に立てた喜びでいっぱいでした。

この度の出演にあたって、いろいろお世話いただいた関係者の方々や、協力してくれた甥家族、姪家族に感謝しております。

戦争の遺跡 忠魂碑について

山崎郷土研究会
大谷司郎

いまさら何かと思われる年配の方もいらっしゃると思いながらではありますが、現在国内各地で忠魂碑が存続の危機にあることを耳にし、現状を記録しておきたいと山崎町内の忠魂碑を巡りました。

忠魂碑は大正時代から昭和初期に多くが建立されています。当時の各自治体（山崎町は一町七ヵ村）に組織されていた帝国在郷軍人会が主体で建立しています。

徴兵制度の下、現役出兵者以外で四〇歳までの国民兵役の者を在郷軍人というので、全国で三〇〇万人の会員を擁し、地域の中堅層の人たちが在郷軍人会員でありました。在郷軍人会を通して、軍部は総力戦を見据え拘束していたことになります。この会では各自治体に分会を置き、地元の戦没者の慰霊をする招魂祭が主な取り組みでしたが、大正時代になり、多くの分会で日露戦争の記念碑として忠魂碑を建てるようになりました。町内の八ヵ町村の忠魂碑をみても半数以上が大正期のものです。ただ、旧城下村はいち早く明治末年に建立されています。山崎町内の各所にある忠魂碑は碑文や刻字が剥脱している部分もありますが、碑自体は往時の姿を残しています。

私は小学生のふるさと学習の見学コースの一つに在郷軍人会蔦沢分会が建立した忠魂碑を入れています。明治から昭和の時代にあった戦争で多くの人が亡くなり、家族や隣人知人を亡くした地域の悲しみが詰まっている碑であることを伝えています。

旧蔦沢村の忠魂碑（上牧谷）

戦後は遺族会が戦死者を追悼するため、碑を守ってきましたが、会員が高齢になり、世代交代が進む中で碑の存続が困難になってきています。子供たちに平和学習をする生きた教材として戦争の遺跡「忠魂碑」を何とか後世に残していきたいものです。

感謝の気持ちをもって

宍粟和太鼓アーツ倶楽部
藤永幸正

私が和太鼓を始めたのは三十八歳の時でした。

気が付けば十八年を過ぎていました。和太鼓を続けていく中で、和楽器の楽しさというか日本の伝統文化の奥深さを知ることもできたと思います。それと同時に、単に太鼓が上手になるということが楽しいのではなく、太鼓を打つために必要な体力づくりや考え方、立ち居振る舞いが大切であり、太鼓に携わってきたこの十八年間は自分自身にとっても大きな刺激になりました。というのも演奏を披露する際は、自信がない演奏をするとその自信のなさが見ている人には必ず伝わります。やはり日ごろの練習や考え方をしっかりと持ち、準備したうえで演奏を披露することで感動は与えられるということです。

これは太鼓だけに限らず日常生活や仕事においても同じことで、この年齢になっても改めて考えさせられています。そして太鼓を続けられていることへの感謝、指導者や関係者の方々への感謝、この感謝の気持ちを大切にし、今後も続けていけたらと思っています。

さて、今年度も「和太鼓と篠笛のつどい」を開催する予定です。昨年度もたくさんの方々に来場いただき感謝しています。今回も出演者が一丸となり心をつないだ演奏で皆さんに感動を与えられたらと思っています。今後も宍粟和太鼓アーツ倶楽部をよろしくお願いいたします。

詩吟とともに五十余年

山崎詩舞道連盟
吟道摂楠流　山崎支部
山口　摂徹

たはむれに　石川啄木
たはむれに　母を背負ひて
そのあまり　軽きに泣きて
三歩あゆまず

摂楠流では令和六年度より和歌の部、漢詩の部で、吟士権者を選ぶ事になりました。

漢詩よりも和歌の方が百人一首などで親しみやすい方々も多いのではないでしょうか。

五七五七七の和歌の構成を考慮に入れ、詩吟調に流れないことに気をつけて無理のないように吟じるようにしています。

これまでは、和歌の部は、高年部で競われて来ましたが、今年から会員すべての方々が対象になります。大勢の方々が出吟される事を期待しています。

北部地区連合会の会員を対象に、吟力向上と、会員相互の親睦を図る事を目的に、錬成部を発足してから早や十年余りが過ぎました。役員の先生方の負担を考慮し、年三回のみ練成会を開催しています。毎回出席される人、今日は聴くのみで、仲間の吟を聴き吟指導を一緒に勉強する人、また飛び入りで吟詠を指導してくれる人など、熱心に取り組み吟詠を楽しんでいます。今後も運営委員の協力を得ながら、共に勉強し吟を楽しみながら受講者が成果を得られるように続けたいと思います。

この度令和五年十月十五日にふれあい文化の祭典にて兵庫県吟詠連盟より、「吟功賞」を頂きました。これからも吟詠活動に力を注いで行きたいと思います。

これからの宍粟に思いを馳せて

平成会
山中　潤一

思えば昨年はロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ攻撃や国内の政界不祥事と暗いニュースが続く一方、県内外および国内外のスポーツ界では侍ジャパンのＷＢＣ優勝、バスケット・バレーボール男子の活躍、阪神タイガースやヴィッセル神戸の優勝と、若手世代の台頭による明るい話題に沸いた一年だった。

今後、台湾有事を含め、米中関係が緊迫する中で、アジアの複雑な地政学的および安全保障上のリスクと、いかに日本が向き合っていくかが重要となり、それには国際的な文化・歴史の相互理解が必要となる。例えばイタリアのローマ、フランスのパリ、日本の京都など各国の代表的な歴史的都市が時代に適応しながら個々の特徴的文化を堅持しつつ、他国と協調して時代の荒波を乗り越えてきた経緯等が参考になろう。特に地方においても国際的な視野を持ち、これらの問題に精通した若い世代の育成が喫緊の課題となる。

これは宍粟においても同様で、複雑多様化する国際社会の中で、日本の一地方都市として独自の文化を育みながら有能な後継者を輩出して存続するためには、現在の指導者・教育者による若い世代育成のための環境作りが鍵となってくる。

筆者自身も国外の大学医学部准教授を経て、国内医科大学での准教授・特別招聘教授を含め二十年以上にわたり、若い世代の育成・指導に携わった経験より、教育の大切さを身に沁みて痛感してきた。

たゆまぬ教育努力による文化レベルの向上と、その土地に根付いた人々の自由を愛する良心が相乗効果を生み、今後この地域においても、国際的に通用する豊かな地方文化が醸成されることが期待される。そしてこれからの時代を泳ぎ切っていくための幅広い見識と地政学的リテラシーを兼ね備えた、地域の発展を担う、新しいリーダーの登場が待たれる。

私の歩き遍路

昭和会
野村和男

昭和会では会員の高齢化に伴い夜間の月例会は昼に移行し、年に数回実施していたゴルフコンペも消滅してしまいました。令和五年は会食しながらの親睦の機会を増やしました。

昭和会の活動が会員の体力に応じて変化するように、私自身の活動や趣味も大きく変化してきました。

以前は三日間ほど日程の都合が付けば四国に出かけ、体力に任せて歩き遍路を区切りながら続けていました。宗教心からではなく、ただ何となく四国八十八カ所をお遍路姿で巡ってみたい。菅笠を被り白装束に杖をついて木漏れ日の差す林の中を一人歩いてみたい、そんな自分の姿に憧れていたのかもしれません。

宗派が違うお経も覚え、お寺に到着すると大きな声で読経もしました。ただ歩くためだけに四国遍路に挑戦していました。

色んな景色の変化を楽しみながらの四国遍路。でも一日中歩いてもお寺（札所）にたどり着けない日もあります。また、疲れて何も考えられなくなり、ただ歩いているだけ、無の境地になる時もありました。

一日三〇㎞以上を重いリュック背負っての一人旅。

帰宅すると毎回点滴をしてもらう、体力の限界を超えての歩き遍路。

でも歩き遍路をして〝ありがたい、ありがとう〟感謝の気持ちが心より感じられるようになりました。暑さでヘトヘトになっている時、軒先や木陰の何とありがたいこと。雨風のしのげる遍路小屋、疲れた時に飲む水一杯、空腹時のおにぎりのありがたさ。

私は何も出来ない、皆さんのおかげで生かされているんだと実感しました。

疲れて道ばたに座っていた時のお接待、そんな体験をもう一度したいから歩き遍路に憧れているのかもしれません。

しかし膝の手術、股関節の不調、首と腰の脊柱管狭窄症等、すっかり体力が弱ってしまいました。

日程調整がうまく行かない事もあり、歩き遍路から遠ざかって早六年。今はお遍路の代わりに〝ポケモンGO〟で歩き回っています。

何かの本に書いてありました〝出来ないことを嘆くより、出来ることを頑張ろう〟

もう一度まねごとでもいいから山道や危険な場所は避け、今の体力にあった歩き遍路に挑戦したい気持ちが湧き起こっています。

阪本喜美枝先生を偲んで

宍粟茶華道協会
清瀬恵子

令和五年六月二十九日、九十一歳の生涯を閉じられた阪本先生。こよなくお茶、お花を愛し、亡くなる三週間前までもお稽古をされ、「皆と一緒に居たら元気になれるんや！」とニコニコ笑顔で私達とお稽古のひとときを過ごされていました。あまりにも呆気ないお別れに戸惑い、受け入れ難く茫然とするばかりでした。

十一月三日の文化祭には、花展において阪本先生の遺影を飾り、先生を偲ぶ花を生けさせていただきました。今まで前例のないことですが、皆様のお許しをいただき五点出させてもらいました。大きな事はできませんので、せめて私達の気持ちを表わしたかったのです。

先生の大好きな宍粟の山、庭にある花材で、前田社中さんにも仲間に入ってもらい、仕上げることができました。「あんた！ようしたなあ！」と肩をたたいて言ってくださいますよね。

笑いの絶えない、家族的で楽しく明るい社中、何十年も続けてきましたが、亡くなられた方、一人減り二人減り、少人数にはなりましたが、残された私達、若い社中さんと共にこれからも支え合って楽しんでいきたいと思っております。

川柳破丸会

長川伸介

新型コロナが五類に移行し、少し安心したのも束の間、今度はインフルエンザが猛威を振るい始めました。

また、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルとハマスの紛争、北朝鮮の相次ぐミサイル発射など、世界を分断するようなきな臭いニュースにもうんざりする毎日です。

我々破丸会は、こういった世相を反映する句も創りますが、やはり読まれた方にクスッと笑っていただけるような楽しくウイットに富んだ句をお届けしたいと日々創作活動に励んでいます。

なお、破丸会はこの四月に三〇〇回目の例会を迎えます。その節目に記念句集を発刊したいと考えていますので、楽しみにお待ちいただければ幸いです。

薄頭　髪かき上げる　癖抜けず
古家に　古女房と　古希迎え
毛の量に　合わせてほしい　散髪代
ふざけるな　言ったぞ部長に　夢の中
生田　大思案

夫婦愛　共に刻んだ　深い皺
あの時の　言葉の深さが　今解り
「ヘンーシン」の　息子も今はええ親父
返事だけ　いつもええ人　なんやけど
大村　幸融

年月は　早く過ぎるが　日は長い
新聞を　テレビ欄から　見る歳に
病歴を　交わす八十路の　同窓会
川柳を　一句詠むのに　四句八句
岸本　新風

過疎の町　だんだん早まる　最終便
初詣　消毒液で　身を清め
行間を　都合よく読み　ご満悦
いそいそと　出かけて気付く　定休日
黒川　花稜

お互いに　聞かず喋って　満足し
挨拶も　せずに次々　友は逝き
飲む薬　前に並べて　食事する
聴く耳は　ないがまだまだ　口達者
清水　三省

孫が鬼　つかまるふりの　おばあちゃん
ついて来い　言った夫が　ついて来る
ウソ泣きも　可愛い頃が　あった妻
Vサイン　監視カメラに　愛想する
菅谷　美風

聞き取れぬ　話もニッコリ　相槌し
耳学問　話す夫に　馬耳東風
用はない　けれど終われぬ　長電話
年明けの　初外出は　医者通い
谷口　遊愉

免許証　返して乗ってる　車椅子
休肝日　休みたいのに　休めない
同窓会　健康な俺　蚊帳の外
六文銭　忘れて三途で　後戻り
谷口　柳幸

ばあさんに　夜更かしさせる　ＷＢＣ
旅プラン　頭はゴーで　足が止め
終活など　いらぬ身軽な　我が人生
歯科通い　どうにか雑煮　間に合った
千本　風筅

スクワット　やって翌日　整体に
マヨネーズ　カロリーハーフ　倍使い
よっこらしょ　受話器を取れば電話切れ
減塩の　メニュー頼んで　醤油かけ
中居　絵師

寒くなる　設定し直す　まず便座
動くより　おしゃべりすると　元気出る
読まんけど　いろいろ使える　新聞紙
用事ない？　座る前だけ　聞く女房
坂東　笑雅

神様と　カミ様の声　逆らえず
親父ギャグ　雪はなくても　初すべり
うさぎ年　飛躍もお腹も　三段で
妻の愚痴　一方通行　事故はなし
船元　哲心

なん人も　最後の旅は　一人旅
神様で　川柳作る　ばちあたり
住き人と　過ごす時間は　早く来る
信心は　鰯の頭も　神にする
安井　楽庵

結婚を　神父に誓う　仏教徒
講演の　最後はちゃんと　目覚めてる
日に三度　行方不明に　なるメガネ
喉までは　来るが出てこぬ　その名前
長川　酔伸

山崎・加生・つた・いさわ冠句会

中瀬　公三

友の声　ちゃんづけで呼ぶクラス会
日向ぼこ　本を読みつつ夢心地
大谷　志路

友の声　気持ち安らぐ同級生
日向ぼこ　世間話に花が咲く
為国真佐行

友の声　昔話に背を押され
日向ぼこ　着ぶくれ二人熱いお茶
内海喜代子

友の声　旅の誘いは軽やかに
日向ぼこ　冬の日射しに誘われて
実友　勉

友の声　話題はいつも体脂肪
日向ぼこ　豆選りながらうとうとと
宇田　和代

友の声　心に残る応援歌
日向ぼこ　日々の喧騒忘れ去り
入江　敬一

友の声　思わず涙電話口
日向ぼこ　カメムシ君も出て来たり
谷笹　まや

友の声　互いに励み背中見て
日向ぼこ　冬芽すくすく陽を浴びて
宇田　幸夫

点々と　生きた証の自分史を
時刻む　丸く治める老いの知恵
坂本　忠彦

点々と　続く出会いが道になる
時刻む　昔の夢と今の夢
飯塚　正浩

点々と　ピンクに染まる春の山
時刻む　秋桜の歌詞口ずさみ
嶋津　千里

点々と　春の雨降り垂れる雫
時刻む　父母との暮し限りある
高井　玲依

点々と　空き家が目立つ里の町
時刻む　幾たびか聞く除夜の鐘
成影　廣子

点々と　青空に刻む雲の色
時刻む　人の顔にも味が出る
西家　侑希

点々と　輝く星の美しさ
時刻む　可愛いわが子が母になり
三木ひづる

点々と　木々のみどりも濃く淡く
時刻む　しみじみ見てる腕のしわ
山口　定子

点々と　猪の歩いた畑の中
時刻む　待合室は順番に
中瀬　公三

宍粟市山崎文化協会ホームページ　ご紹介

宍粟市山崎文化協会及び加盟文化団体の活動を紹介しています。

- 主催事業「春の芸能祭」、関連事業「秋のふれあい文化祭」、「しそうの森合唱祭」等のステージの様子（動画配信）
- 機関誌「やまさき文化」を電子配信（バックナンバー含めて配信）
- 加盟団体の活動、機関誌の紹介（山崎郷土研究会「郷土会報」バックナンバーの電子配信）
- 関連事業「山崎八幡神社薪能」紹介
- 「しそうの逸話」動画配信、etc.

アドレス（URL）
https://www.yamasaki-bunka.org/

宍粟市山崎文化協会　検索

「宍粟市山崎文化協会」で検索してください

ホームページ

ともしびの賞　受賞

鎌田　裕明 さん

鎌田裕明さんに、この度長年にわたり地域文化の発展に貢献してきた人たちに贈られる「ともしびの賞」が兵庫県からを授与されました。

鎌田さんは居住地にある山崎闇斎神社に祀られている山崎闇斎の教えに感銘を受け、その学問を地域の人たちとともに学び、広めるため「山崎闇斎研究会」を立ち上げ、中心となって研究を続けられました。同会の会長も務め、闇斎の書籍や門弟の書物を会員の学習会で輪読したり、意見交換したりするなかでその研究成果を小冊子に編集して、地元や関係機関に配布する等、地域の歴史文化の継承に貢献されました。

また、山崎文化協会が毎年発行しているこの『やまさき文化』の編集委員として長らく携わり、その内四年間編集委員長も務められました。特に令和元年の第三八号では、巻頭随筆に「福原謙七・輝ける日々」を寄稿し、闇斎の教えをつなぐ人たちにも研究の幅を広げられました。

さらに、山崎郷土研究会では『郷土会報』に多くの寄稿をされ、また、新潮会でも地域の歴史や文化の振興に尽力されました。鎌田さんのこの度の受賞とこれまでの功績を称えてここにご紹介いたします。

宍粟市山崎文化協会 役員及び団体名

会　長　前野　良造（山崎郷土研究会）
副会長　三谷　恭三（宍粟市少年少女合唱団）
　　宮脇　昭介（山崎俳句協会）
　　秋久　澄子（宍粟美術協会）
　　大谷　司郎（山崎邦楽の会）
理　事　廣居　克彦（山崎日本舞踊の会）
　　宇田　詔三（山崎詩舞道連盟）
　　三宅　哲朗（新潮会）
　　田中　涼子（山崎囲碁同好会）
　　三谷　恭三（宍粟茶華道協会）
　　下村　孝吉（宍粟市謡曲同好会）
　　幸嶋恵美子（昭和会）
　　鳥羽チエノ（宍粟市少年少女合唱団）
　　土方　研三（山崎俳句協会）
　　辛川　健二（宍粟美術協会）
　　岸本　幸子（山崎日本舞踊の会）
　　福井　茂（山崎詩舞道連盟）
　　藤永　幸正（宍粟和太鼓テーツ倶楽部）
　　菅原　淳（平成会）
　　石田　陽子（山崎民謡連合会）
　　長川　伸介（川柳破丸会）
　　宇田　幸夫（山崎・いさわ冠句会）
　　小林由佳子（宍粟山崎手作り甲冑の会）
　　山本　修示（宍粟市吹奏楽団）
　　山根　和成（山崎郷土芸能保存会）
　　加古玖美子（森の国オカリナアンサンブル小鳩）
監　事　畑中　正之
　　菅原　淳
事務局長　伊藤　次郎
事務局次長　谷林　哲哉
会　計　小西　美穂

（敬称略・順不同）

「やまさき文化」編集委員

編集長　大谷　司郎
委　員　秋久　澄子　　鳥羽チエノ
　　長川　伸介　　野谷るり子
　　山本　修示　　小西　美穂

事務局だより

十一月十八日、十九日と山崎もみじ祭りの一環で山崎文化協会が山崎八幡神社の能舞台を一般公開させていただきました。本年度で二回目となる事業ですが、今回は文化協会の所属団体に出演を呼びかけ、日本舞踊の会と少年少女合唱団及び市内のフォークソンググループの三団体に出演していただきました。

この能舞台は江戸時代、十七世紀後半に本多公が建立され、当時の奉納薪能や、近年では地元奉賛会による薪能が催行されてきました。平成十九年に町内篤志家により、構造物を始め檜舞台、正面奥壁の鏡板や上手の地謡座など大改修がなされました。

鎮守の森に包まれたこの能舞台は木洩れ日のうつろいがあり、社叢は適度な音響反響板となり、鑑賞者は居心地のよい深遠な世界へと引き込まれていきます。まさに管弦のホットスポットなのです。

今後、多くの文化協会所属団体の皆様が出演され、ご披露いただくことを念願しています。ご協力をお願いいたします。

事務局長　**伊藤　次郎**

編集後記

この三年間、コロナ禍で各種の文化事業が制約を受け、多くの活動ができない状態が続きました。今年度になり、いざ解除となって以前通りにそれらの事業が復活したかと言えば、そうなっていないのが現状です。文化活動の担い手の体力や気力の維持が気になるところです。

しかし、今回の本機関誌に寄稿された所属団体の皆様は文芸、芸術、芸能など各分野で制作活動や身心鍛錬など、個を高める取組を休むことなく継続されていて心強く感じました。

巻頭の「訳者としての木村宗三」では幕末から明治期を生きた木村の業績について、現役を退官後Uターンされ、なお旺盛な探求心をもってまとめられた柳田芳伸先生に心より感謝いたします。読者には山崎と木村の縁をもって、激変の明治期に翻訳を続けた彼に思いを馳せていただきたいものです。

また、特別寄稿の辛川誠先生には、現役真っただ中でご多忙な時間を割き、「若いうちの苦労は・・」と若者にエールを送っていただきました。

昨年、山崎歌人協会が会員の高齢を理由に解散しました。奇しくも時を同じく、姫路文学館では山崎の短歌の隆盛に貢献した歌人安田青風没後四〇年記念展が実施されました。現在短歌人口は減少していますが、九〇歳を過ぎた歌人山崎智絵さんは短歌の頁を守ろうと、遠い過去の追憶を能登半島地震の災害で思い起こし、命の尊さと平和を願うご寄稿をいただきました。

本誌にご協力いただきました皆様に心から敬意と感謝を申し上げます。

編集長　**大谷　司郎**

やまさき文化　第43号

令和6（2024）年3月25日

編　集　『やまさき文化』編集委員会
発　行　宍粟市山崎文化協会
事務局　宍粟市教育委員会事務局
　　社会教育文化財課内
印　刷　デザイン・いんさつ工房　萬まる堂

ふじむら貸衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三
また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など
豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。

兵庫県宍粟市山崎町山崎１８１　Tel:0790-62-0052　http://www.fujimura-kashiishou.com

贈り物に…「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷（ふるさと）の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のほのかな香りをお楽しみ下さい。

トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

¥2,420（税込）

さらにレーザー彫刻（オプション）であなただけの１本に…

参加賞、記念品に…しーたんステーショナリー各種あります！

ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食　○法要後の会食・仕出し
その他各種宴会承ります
リラクゼーションルーム　好評稼働中

〒671-2517　宍粟市山崎町生谷214番地１　TEL0790（63）1380

コーエーカメラ

Specialty Camera Shop

■本　店/〒671-2576
宍粟市山崎町鹿沢26-3
TEL(0790)62-2089　FAX(0790)62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790)63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com

おつきあい100年宣言

ヤマヒロ

株式会社　山　弘

新築　リノベーション　リフォーム

住まいのこと、何でもお任せください

FreeDial 0120-12-8076

本　社／宍粟市山崎町須賀沢704

■はりまの杜 住宅展示場（姫路店）　■たつの店　■加古川店

●ホームページ
http://www.yamahiro.org
こちらからもご覧いただけます▶

森の妖精/ネーチャ

地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして

●豊かな街づくりをお手伝いする●

西兵庫信用金庫

https://www.shinkin.co.jp/nisisin/

TEL 0790－62－2020

森の妖精/サッキー

＝ お車と住まいの快適、なんなりと ＝

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・電力・洗車・バッテリー
タイヤ・オイル・カーリース ☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・おそうじ代行 ☎0790-63-1234

不動産のことならお気軽にご相談下さい

土地・建物・売買・仲介・マンション・アパート賃貸

株式会社ファースト商事 エイブル

親切丁寧をモットーに社員一同皆様のご来店をお待ちしております。

株式会社ファースト商事
エイブルネットワーク山崎店
宍粟市山崎町今宿２１番４
TEL ０７９０－６２－０００１
FAX ０７９０－６２－４７８７

株式会社ファースト商事 福崎店
エイブルネットワーク福崎店
神崎郡福崎町西田原１８２１番４
TEL ０７９０－２２－１２３５
FAX ０７９０－２２－１２３６

つくるでつなぐ

UEBAYASHI

上林建設株式会社

イメージ キャラクター
けんちくん

〒 671-2554 兵庫県宍粟市山崎町御名226番地1

TEL.0790-62-2828 FAX.0790-62-7186

各種新車・中古車・介護車輌販売 リース 車買取
民間車検 整備 鈑金・塗装 ボディーコート ETC

まごころサービス

光徳自動車販売株式会社

〒671-2542 兵庫県宍粟市山崎町船元242

TEL 0790-62-1780

E-mail: koutoku@gol.com